

## 大野城市の伝説 1 (御笠の森)

大野城市教育委員会



現在の御笠の森

### 笠が飛んだ話

大野北小学校正門前の県道36号線をへだてて、北西300メートル程の山田2丁目9番の地に森があって、昔から「御笠の森」と呼ばれています。日本でも最も古い歴史の本といわれている「日本書紀」や、元禄時代に書かれた、「筑前国続風土記」という本に、『仲哀天皇のお后である神功皇后が、荷持田（甘木市秋月字野鳥）に住む羽白熊鷲という豪族を従わせようとして、櫛日の宮（福岡市東区香椎）から松峽宮（朝倉郡三輪町）へ向かわれていると、突然つむじ風が

起り皇后の被られていた笠が吹き飛ばされて、この森の木にひっかかったため、御笠の森というようになった。そして、この地方の地名も御笠郡と名付けられた。』と書かれています。



武内宿禰以下大勢の軍兵を率いて、櫛日の宮から大野に出られ、宝満山から流れ出て博多湾にそそぐ川（御笠川）のほとりを荷持田をめざして南へ向かわれた神功皇后が、大野城市の筒井の辺まで進まれたときに、いたずらなつむじ風が皇后の笠を奪ってしまったのです。そこで土地の人達は、笠がぬげたところに「笠抜き」という地名をつけました。

今は住居標示により旧字名は廃止されていますが、大野城市大字上筒井小字笠抜の地名は、こうして起こったということです。

皇后の笠が吹き飛ばされたのにびっくりしたお供の人達は、急いでその笠を追いかけましたが、空高く舞い上がった笠は風に乗って、くるくる廻りながら北へ北へと飛んで行って、1キロメートル離れた山田の森の、大きな楠の木のかずえにかかってしまいました。

やっと森までたどりついたお供の人達は、さっそくこの笠を取ろうとしますが、高いかずえに笠の紐が巻きついて、どうしても取ることができません。お供の人達はたいへん困ってしまいました。



そのさわぎを見つけて村の人達も集まってきました。事情を聞いた村長は森の神様むらおきにお願いして取っていただく以外に方法がないと思い、お供の人達と相談しました。そして、森の前の田んぼの



御笠の森（昭和15年）

森の中に足を進めると、天保11年(1840)11月4日に山田村の河波定吉氏の建立による、神功皇后社の石の祠と、明治百年を記念して昭和44年に大野町が建てた、大宰大監だいざいだい大伴宿禰百代の万葉歌碑ばんのおともすくねももよ（巻四、五六一）があり、遠い昔を偲ぶことができます。

なかで神様に奉納する舞が始まりました。

するとどうでしょう。枝にからまっていた笠の紐は、ひとりでにするするとけて、笠はひらひらと舞を舞っている人の上に、降りてきました。大変喜んだ村人達は、そこを「舞田」と呼ぶようになりました。（大野城市史・民俗編）



こうして「御笠の森」「御笠郡」の名がつけ

られ、川の名も「御笠川」というようになったということです。

現在の御笠の森は宅地化の波が押し寄せ、人家に囲まれた中に、たぶ・しい・くろがねもち等の大木がほんのわずか残っているに過ぎませんが、昭和20年代までは、田んぼの中に島のように浮かんだ大きな森でした。



神功皇后社の祠



#### 御笠の森を詠んだ歌



大伴宿禰百代の歌碑

万葉集 大宰大監大伴宿禰百代

念はぬを思ふといはば大野なる

御笠の森の神し知らさむ

新千載集 津守國冬

大野なる御笠の森のゆふたすき

かけてもしらし袖のしくれは

現存集

大野なる御笠の森のほうかしは

神のしらてしいくよさすらん

名寄集

大野なる御笠の森に時雨ふり

そめなす紅葉今さかりなり

（出典：大野城市史・福岡県史資料 他

協力者：赤司岩雄氏）

（2002.3.31）